

暑中

気がつけばお盆の頃、猛暑で汗を拭きふき霊も戻ってくることになるのかもしれない。

7月半ばに一つ年をとり、いよいよ高齢も頂点に達しました。丁度、このころ義理の次男が預かっていた猫を引き取りに来ました。次男夫婦は、マルチニク島から、孫息子はフランスから、孫娘は祖母の家から合流して、やってきました。猫は、なついて可愛くなっていたのですが、外に出ることになれていたもので、鳥も虫も窓越しに見るだけの暮らしは限界に達していたようです。機嫌が悪い日も多くなり、爪を研ぐ回数も増えてきました。ベッドの下に潜り込み、マットレスめがけて爪をカリカリしていましたから、マットレスがひどい状態になっているのかもしれません。家に戻ると森に向かって一直線に駆け出し、一晩戻らず、朝帰りの猫はそのまま、翌朝まで眠り続けたと次男から電話がきました。自分のテリトリーを再確認し回っていて、さぞかし忙しかったのでしょう。猫ライフも楽ではなさそうです。

私の誕生祝いはささやかに、婿殿の手製のピザにしてもらいました。婿殿は一晩生地を寝かせ、具もナチュラルなトマト味（バジルをのせる）、モザリアチーズ、ペペロンチーニと工夫をこらし、3種類のピザを焼いてくましました。ほぼプロです。これにプロも顔負けの濃い目のコーヒーがつきます。婿殿は、ベランダにあるピザ焼き器に数分のせて焼いてきます。焦げ目がつくと食べ頃です。一番おいしかったのは、ナポリ風のナチュラルなトマト味のピザでした。生地がかりっと焦げ、実に美味なのです。この日は、日本並みの33度の猛暑。頑張って焼いてくれました。

娘からの誕生日のプレゼントは庭園百科事典。フランスの庭園が90%です。庭園にまつわる、色々な話しも入っていて、庭園だけでなくフランスの文化全般が伝わってくる

百科事典です。毎日楽しみながらページをめくっています。庭園のイラストを眺めながら、改めて思ったのは、欧米の人たちと日本人との美観の視点の大きな違いです。美しい庭園は、例外なく幾何学的な構成になっているのです。ベルサイユ宮殿の素晴らしい庭園も、中央に線を引くと、右と左が全く同じな相似形になっています。欧米人は合理的な考え方と言われていますが、美観は、二次元で平面的です。考えなくても、頭が型にはまってしまうほど抑圧的な美観なのです。日本の借景を取り入れた回遊式庭園のような立体感からはかけ離れたものです。日本人の美観は三次元的なものかもしれません。長い間いけばなを欧米人に教えていて。これにはきずいていました。欧米人に奥行きを出すいけ方というのは、死ぬほど難しいことがあります。この幾何学的な二次元の感覚が身についてしまっているのだと、ページをめくりながらやっぱりと思った次第でした。

さてさて、70代最後を数日後に控えているドリトル先生は、近頃大分弱気になってきました。つい最近のある日のこと、疲れきって汗を拭きふき、ため息をつきながら戻ってきました。

「僕の駐車スペースに誰か知らない人の車がはいっているんだ。仕方がないから、ガレージの外側の路上にとめてきたけど。どうしよう。。。」

そんな事を言っている場合かな？ マダム田中は、ドリトル先生に、

「紙に、警告！ここはプライベートの駐車スペース。車をすぐどけろって書いて。連絡先も入れてね。」

マダム田中はセロテープをバッグに入れるとこの紙をもって走り出していったのです。隣のコンドミニアムの建物の住居者用のプライベートガレージのスペースの一つを所有しているのですが、ここ1週間ほどガレージの入り口が壊れて開いたままになっていて、誰でも駐車できるリスクがありました。マダム田中はとまっている白のクーペにこの紙をべったり貼ると、車の写真をとりました。階段を駆け上がり、その上の階にある管理会社のドア（常に不在）に書いてある連絡先の写真もとって、家に戻ってきました。

「どこに行っていたの。随分長くかかったんだね。心配していたんだから。」

「状況の整理をしていたのよ。この管理会社に電話するか写真をつけてメールして。」

「ぼ、ぼく、わからないよ。」

「管理会社の管理不行き届きなんだから、何かすべきだと思うわよ。」

丁度バカンスシーズンということもあるのか、事務所の電話も緊急の電話も返事がありません。

「これから、車に戻るから。」

「ど、どうして？」

「考えがあるから。この車の持ち主をとっつかまえるか、レッカー車よ。」

「僕も一緒にいくよ。」

ガレージに着いたまさにその時、見たのです。このべったり貼られた紙を手にして車に触っている若い女の子を。

「ちょっと、貴女、ここ我が家の駐車スペースよ。」

「でも、私のスペースに他の車はいっていたから」

「そんなわけないでしょう。他は空っぽよ。すぐ出て行って。その車どけて、ここはプライベートの駐車場よ。」

「でも、お母さんが、お母さんが。。。」

スマホを手にとるとどなる母親の顔がでてきました。

「だからどうしたの？私は知らないわよ、こんな人。警察呼ぶわよ（警察が役にたつとは思えませんが）。出て行って。」

彼女は震えながら、キーを入れると必死になって出ていきました。

「やっと出て行ったね。でもどうして、彼女が来るとわかっていたんだ？」

「感よ。それと時間帯。5時過ぎれば大半の人は仕事から戻ってくるとわかっているから、それまでここに勝手に無料で駐車して、かえって来る前にうまく逃げようという計算だろうと思ったから。」

「それにしても、君は魔女のような感の持ち主なんだね。」

魔女ではありません、心理を読む探偵の捜査のようなものです。ともかく、無事に駐車スペースは戻りました。翌日、相変らず留守な管理会社はスキップして、ジャンターに電話をすると、

「色々な問題が出てきているんです。バカンスシーズンで修理会社も休みなので、多分、バカンスシーズンが終われば修理できるかと。。」

「たぶんね？」

バカンスシーズンは終わりましたが、まだそのままです。どうなることやら。。ここの暮らしは毎日が闘いです。